

東日本大震災における障害のある被災者の課題検証：
 障害者団体へのワークショップの分析から
 The problem of people with disabilities and their supporters of
 the Great East Japan Earthquake:
 Analysis from the workshop for groups of people with disabilities

○辻岡 綾¹, 松川 杏寧², 立木 茂雄³

Aya TSUJIOKA¹, Anna MATSUKAWA² and Shigeo TATSUKI³

¹同志社大学大学院社会学研究科
 Graduate school of Sociology, Doshisha University
²同志社大学社会学部 特定任用助教
 Research Associate, Doshisha University
³同志社大学社会学部 教授
 Department of Sociology, Doshisha University

By conducting workshop for 16 groups of people with disabilities (PWD) and supporters of PWD, this research revealed the problems of victims at the post-disaster period (0~10hour) of the Great East Japan Earthquake. Problems of these victims differ from the characteristic of disability and their environment. Verification of issues will be conducted to find what kind of measures and policies work for each PWD and supporters of PWD.

Keywords : people with disabilities, problems at the post-disaster period, workshop, the Great East Japan.

1. 研究の背景と目的

本研究では東日本大震災で被災をした仙台市において、被災をした障害のある被災者、また障害のある人々を支援する者（家族、障害者団体職員等）が被災後にどのような問題に直面したのかを、時間（発災から 10 時間）と個人の障害種別によって特徴を調査し、比較する。本研究では、16 の障害当事者・障害者支援団体から集まった被災者へワークショップを行うことで、障害種の違いによる課題要素の相違を明らかにする。課題の整理・分類を通じて、今後それぞれの被災者にとって、どのような政策・施策が有効であるのかを検証していく。

2. 方法

2013 年 10 月 14 日に、仙台市において、障害当事者団体・障害者支援団体から集まった被災者の計 47 名を対象にワークショップを行った。参加団体の詳細は表 1 の通りである。ワークショップでは障害当事者と障害者支援者の方が混ざるように班に分かれ、震災発生後に問題

となった事柄をカードに記入してもらい、その後、内容の親近性にもとづいてカードの分類化を行い、どのようなカテゴリーで問題が多いのかがわかるようにした。またカードに個人を特定できる番号を併記してもらうことで、誰が、どのような問題に直面したのかがわかるようにした。

ワークショップでは被災者の対応行動を異なる 4 つのタイムフェーズ、①災害直後から 10 時間まで、②10 時間から 100 時間まで、③100 時間から 1000 時間、④1000 時間以降、に分けてカードを記入してもらった。本研究において被災者の対応行動を 4 つの時間で分類したのは、青野他¹ (1998)、田中他² (1999) が阪神・淡路大震災で行った被災者の対応行動調査の知見に基づいている。

本研究では、特に第 1 のフェーズである①災害直後から 10 時間まで、で障害当事者・障害者支援者が直面した問題に焦点を当てて検証する。

3. 結果と考察

田中他² (1999) によると、第1のフェーズでは、状況の把握ができず、近隣の救助や安否の確認、避難など目の前に展開する様々な事態に対処療法的に対応する「失見当期」とであると定義されている。

上記で述べられた状況のとおりカードから分類した問題のカテゴリーは、喫緊した課題が目立つ結果となった。大きく分けると、安否確認、情報収集、初動避難、寒さ、家の全壊・半壊、家の中の片付け、避難中（避難所、在宅避難）、水・食糧の確保、ライフライン不通、医療器具や薬の不足、などの問題が挙げられた。

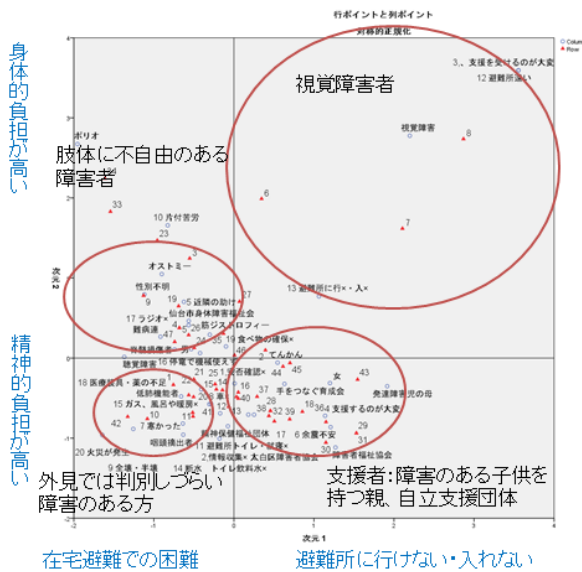
結果の分析には、個人、障害種（どの障害があるか、もしくはどの障害のある人を支援していたか）、どのカ

表 1 参加者の所属

1	仙台市身体障害者福祉会
2	仙台市視覚障害者福祉協会
3	仙台市聴覚障害者協会
4	宮城県咽頭摘出者福祉協会 立声会仙台支部
5	仙台市泉区身体障害者福祉協会
6	宮城県脊髄損傷者協会仙台支部
7	全国低肺機能者グループ 東北白鳥会仙台支部
8	日本オストミー協会仙台支部
9	日本筋ジストロフィー協会宮城県支部
10	仙台市太白区障害者福祉協会
11	仙台ポリオの会
12	社会福祉法人仙台市手をつなぐ育成会
13	特定非営利活動法人 仙台市精神保健福祉団体連絡協議会
14	発達障害児を持つ親
15	宮城県てんかん協会
16	難病連

テゴリーについて問題だと記入したのかを、数量化Ⅲ類を用いてコレスポネンズ分析を行った。その結果が図1であるが、ここから4つの事象に沿って障害種やフェーズが分類された。

図1 コレスポネンズ分析結果



右上の第1事象目では、視覚障害者、支援を受ける事が大変である、避難所に行けない、などがプロットされた。視覚障害者は発災直後の避難でも目が見えないため、一人では行動ができずに困ったことが挙げられた。

左上の第2事象目には、肢体障害者（オストミー、筋ジストロフィー障害、難病者、脊椎障害者など）、家の片付けの苦勞、近隣に助けられた、食べ物の確保に苦勞、停電で器具が使えない、などがプロットされた。

左下の第3事象目には、外見では判断しづらい内部障害者（低肺機能者、咽頭摘出者）、精神障害者、避難所でのトイレ、ライフライン（断水・ガス・電気）の断絶による不便、寒さ、家の全壊・半壊、医療器具や薬の不足、などがプロットされた。

右下の第4事象目には、障害者を支援をする側の人々（発達障害児の家族、障害者自立支援団体の職員など）、安否確認、情報収集、支援をする事が大変である、不安、などがプロットされた。

これらのプロットされた点（個人、障害者、問題になったカテゴリー）を考察すると、次元1（横軸）と次元2（縦軸）に沿って問題に傾向が見られた。次元1では右から左に向かって「避難所に行けない・入れない」→「避難所に行っても不便・環境が悪い」→「在宅避難を強いられ辛い思いをする」、という流れが見られた。

避難所に行きたくても行けなかったり・不便である、という状況は、全ての障害者・障害者支援者に共通した問題である。しかし、図とカードの内容から考察すると、知的障害者（発達障害者）、てんかん患者、その家族と支援者などは、避難所には行くものの、発作や落ち着きのない行動で、周りの避難者へ迷惑をかけた、周囲に気を使うことから、避難所から追い出されるように出て行かざるを得なかった状況がうかがえる。

肢体に不自由がある障害者、特別な装具などを必要とする内部障害者は、当初から避難所に行くことを諦め、在宅避難をしている傾向が強いことがうかがえる。ライ

フラインが止まり、支援物資や水・食料が届かない、医療装具や薬が不足し手に入らない、という在宅避難では、物理的負担が大きかったことが障害当事者、障害者支援者共にかがえる。

次元2では上から下に向かって「身体的な負担が重い（肢体に不自由がある障害で動けない）」→「精神的な負担が重い（内部障害に必要な医療装具や薬の不足、障害者家族や支援者の不安や苦勞）」という流れが見られた。

肢体障害者は、部屋の片づけをするのも健常者に比べると大変な苦勞が伴う。また、停電によって機械や機器類が使用できずに困ったということが、特に脊椎損傷者や筋ジストロフィー障害者でうかがえる。エレベーターが止まっていて逃げることができない、介護ベッドや吸引器が使えないなど、致命的な問題である。

内部障害者・精神障害者にとって必要な薬や医療装具が手に入らないことは、症状の悪化につながり、こちらも致命的な問題になる可能性が予測される。それに加えて障害当事者・障害者支援者にとって、安否確認や情報収集ができない事による精神的不安がさらに増長されたことがうかがえる。

その他に図から考察されることは、障害当事者と障害者支援者の問題としていたことが、明確に分かれたことである。障害当事者の点の周りにプロットされていた問題は「食べ物の確保、停電による機械や機器類が使えない、医療装具・薬の不足、車が使用できない、安否確認」であった。その一方、障害者支援者が問題としていたことは「支援をするのが大変、不安」であった。

4. 今後の課題

今回検証した①災害直後から10時間まで、のタイムフェーズの結果は、今後のフェーズで起こりうる問題の起点である。今回の結果を踏まえ、今後の②10時間から100時間まで、③100時間から1000時間、④1000時間以降、のフェーズについても、個人、障害種による問題の変化を追っていく。また障害当事者、障害者支援者に特有の問題をカード内容からもさらに読み込んで、質的な調査でも明らかにし、どのような政策・施策が有効であるのかを検証していく。

参考文献

- 1)青野文江・田中聡・林春男・重川希志依：阪神・淡路大震災における被災者の対応行動に関する研究—西宮市を事例として、地域安全学会論文報告集, No.8, pp6-39, 1998.
- 2) 田中聡・林春男・重川希志依：被災者の対応行動にもとづく災害過程の時系列展開に関する考察, 自然災害科学, 18-1, pp21-29, 1999